

ハワイ語における関係節中の3人称代名詞の用法

その他（別言語等） のタイトル	Usage of Third Person Pronouns in Hawaiian Relative Clauses
著者	塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	56
ページ	17-23
発行年	2006-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/34

ハワイ語における関係節中の3人称代名詞の用法

その他（別言語等） のタイトル	Usage of Third Person Pronouns in Hawaiian Relative Clauses
著者	塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	56
ページ	17-23
発行年	2006-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/34

ハワイ語における関係節中の3人称代名詞の用法

塩谷 亨*

Usage of Third Person Pronouns in Hawaiian Relative Clauses

Toru SHIONOYA

(原稿受付日 平成18年5月23日 論文受理日 平成18年9月 8日)

Abstract

There are several types of relative clauses used in Hawaiian. In some types, a relative clause contains a third person pronoun corresponding to its modified noun. This paper is to show the usage of the third person pronouns used in three types of relative clauses, focusing on the number agreement. Although each of the Hawaiian third person pronouns has a singular form, a dual form, and a plural form, the singular form is extensively used regardless of the number of the modified noun.

Keywords : Hawaiian, Polynesian, Relative Clauses, Pronouns

1 イントロダクション

1.1 分析対象言語

本稿で分析するハワイ語はアメリカ合衆国ハワイ州の公用語の一つであり、ポリネシア諸語の一つである。ポリネシア諸語は地理上のポリネシア(ハワイ諸島、ニュージーランド、イースター島を結ぶ三角形の内側)で話されている諸言語及びミクロネシア、メラネシアの一部で話されているいわゆる域外ポリネシア(Outlier Polynesia)の諸言語から成る同系統の言語グループである。ハワイ語の他には、タヒチ語、マオリ語、サモア語、トンガ語等がこれに属している。本稿ではハワイ語の分

析結果に関連させて、ポリネシア諸語の中でもハワイ語と同じ東部ポリネシア諸語に属するタヒチ語とマオリ語の先行研究における指摘にも言及する。

1.2 ハワイ語の関係節の概要

ハワイ語には複数のタイプの関係節があり、どのタイプが用いられるかは、被修飾名詞が関係節内のどの名詞句に対応するかにより異なる。

ハワイ語の関係節には、動詞述語文から成る関係節と、名詞述語文からなる関係節の二種類がある。まず、動詞述語文からなる関係節の作り方について概観する。動詞述語文では<時制/相マーカ+動詞>が述語部分となり、その後ろに主語、その他の名詞句の順で続く。

*1 共通講座

- (1) 述語 主語 その他
 時制/相+動詞
 Ua 'ai au i ka i'a.
 [完了] 食べる 私 [対格][冠詞] 魚
 「私は魚を食べた」

動詞述語文からなる関係節の作り方は、被修飾名詞が関係節内の主語に対応する場合、目的語または斜格名詞句（時間、場所、原因・理由等）に対応する場合、所有者名詞句に対応する場合と異なる。

被修飾名詞が関係節内の主語に対応する場合には、関係節内で主語の部分が空白で現れる。nāna（na（所属を表す前置詞）+na（3人称単数代名詞要素）の融合形）が関係節に先行しないタイプ（以下 A1 タイプと呼ぶ、例文は(2)）と、関係節にnāna が先行するタイプ（以下 A2 タイプと呼ぶ、例文は(3)）の二つのタイプがある。以下、被修飾名詞をイタリック体で関係節部分を下線で表示する。尚、紙面のバランスを考慮し、nāna のグロスを省略する。

- (2) *ka po'e i hele pū mai* Ø me ia.
 [冠詞]人々[完了]来る 一緒に[方向詞] ~と 彼
 「彼と一緒に来た人々」-Beckwith (1932:77)
- (3) *ke kahu nāna i hānai mai* Ø
 [冠詞]飼い主 [完了]養う [方向詞]
 「養ってくれた飼い主」-Mookini (1985:73)

例(2)と(3)では、関係節内の主語の部分（(1)に示したように、主語の通常的位置は動詞の後ろである）が空白として現れている。また、例(3)では関係節の先頭にnāna が来ている。nāna 中の前置詞 na の基本的な意味は「所属」であるが、他の用法として、「行為者」を表示する用法もあり、独立文でもその用法で用いられる（例文は(4)）。

- (4) Na lākou i hana
 [行為者]彼/彼女(3人以上)[完了]する
 nā mea a pau
 [複数]もの みんな
 「みんなやったのは彼らだ」-Beckwith (1932:11)

例(3)のような A2 タイプの関係節でも、例(4)と同じように、nāna 中の前置詞 na は「行為者」を表示する用法で用いられていると考えられる。

被修飾名詞が関係節内の目的語または斜格名詞

句に対応する場合は、関係節内で、被修飾名詞に対応する部分が前方照応辞 ai として現れる。（以下 B タイプと呼ぶ）。B タイプには関係節の主語が、独立文の場合と同じく、動詞の後にある場合（例文は(5)）と、関係節の主語が所有形として、被修飾名詞に付く場合（例文は(6)）の二つがある。

- (5) *kahi i wela nui ai ka lā*
 場所 [完了]暑い とても[前方照応][冠詞]太陽
 「お日様がとても暑い場所」-Mookini (1985:29)
- (6) *kona wā e 'ai ai*
 彼の時 [未完了]食べる [前方照応]
 i ka 'ai
 [対格][冠詞] 食物
 「彼が食べ物を食べる時」-Mookini (1985:107)

例文(5)では被修飾名詞は関係節内の斜格名詞句（場所の名詞句）に相当し、ai として現れている。関係節内の主語 ka lā「太陽」は動詞の後にある。例文(6)でも被修飾名詞は関係節内の斜格名詞句（時の名詞句）に相当し、ai として現れている。主語は3人称単数所有形 kona「彼の/彼女の/そのの」として被修飾名詞に付いている。

A1 タイプ、A2 タイプ、B タイプについては様々な先行研究でも一般的な関係節の例として挙げられているもので⁽¹⁾、関係節のタイプの中でも最もよく使われるものである。

A1 タイプ、A2 タイプ、B タイプに比べると用いられる頻度は落ちるが、被修飾名詞が関係節内の所有者名詞句に対応する場合もある。この場合、関係節内で被修飾名詞に対応する部分は人称代名詞の所有形として現れる（以下 C2 タイプと呼ぶ、例文は(7)）。

- (7) *ka mea i 'oi aku kona nui*
 [冠詞]もの [完了]優る そのの 大きさ
 ma mua o ka laehaokela
 ~に 前 ~の [冠詞]サイ
 「サイよりもその大きさが勝るもの」
 -Mookini (1985:9)

例(7)では、関係節内の被修飾名詞に対応する部分は3人称代名詞単数所有形 kona「彼の/彼女の/そのの」として現れている。以上が動詞述語からなる関係節のタイプである。

名詞述語文からなる関係節の作り方について概観する。名詞述語文とは、<前置詞+名詞>が述語部分となり、その後ろに主語名詞が続く文のことである。

物について述べているため、明らかに単数である。

また、A2 タイプの関係節は被修飾名詞が人間、神、動物など生き物が多いが、無生物名詞が被修飾後に来ることもある。この場合も同様に nāna が付加される。

(13) 'a'ohē 'ike nāna e pa'i i kou po'o
 ない 知見 [未完了]叩く [対格]君の 頭
 「お前の頭をたたく知見はない＝お前をしのぐほどの知見を持ったものはいない。」

-Nakuina (1902:17)

例(13)の場合では nāna 中の-na は被修飾名詞 'ike「知見」に対応している。ここでは明示的に単数・複数の区別を示すものはないが、「そのような知見はない」という否定的な意味なので、単数の「知見」と解釈されていても不思議ではない。例(12)と(13)だけを見る限りでは、被修飾名詞と関係節中の人称代名詞要素の数は一致していると考えられることもできる。

しかしながら、A2 タイプの関係節で、被修飾名詞が複数のものを指すと考えられる場合でも、nāna に対応する双数形 na lāua (lāua「彼ら二人、彼女ら二人」) や複数形 na lākou (lākou「彼ら三人以上、彼女ら三人以上」) ではなく、3 人称単数代名詞要素を含む形である nāna が用いられる。すなわち、被修飾名詞が複数の場合でも、関係節内では単数形で対応している。

(14) 'o nā 'lii nui wale nō ka mea
 [NC][複数]酋長 大 だけ [冠詞]者
 nāna e kū ke kahili o
 [未完了]掲げる[冠詞](貴族の)印 ~の
 ke 'lii nui
 [冠詞]酋長 大
 「大酋長の印を掲げる者は大酋長達だけだ」
 -Beckwith 1932:129

例(14)で nāna 中の-na (3 人称単数代名詞要素) は被修飾名詞 ka mea「者」に対応している。冠詞 ka は単数・複数の区別を明示する冠詞ではないが、ここでは nā 'lii nui「大酋長達」(nā は明示的に複数を表す冠詞) という複数の人物について述べているため、内容的には明らかに複数である。それにもかかわらず、関係節中では 3 人称単数代名詞が対応している。

被修飾名詞自体が意味的に複数のものを指す場合でも同様である。

(15) 'o lākou nō ka po'e nāna e
 [NC]彼ら [強調][冠詞]人々 [未完了]
 ho'okolokolo i ka po'e hihia
 裁く [対格][冠詞] 人々 もめている
 「もめている人々を裁く人達は彼らである」
 - Beckwith (1932:147)

例(15)では被修飾名詞は ka po'e「人々」であり、意味的には複数の人間を指しているにもかかわらず、3 人称単数代名詞要素-na を含む形 nāna が用いられている。

さらに明確な複数の例として、被修飾名詞に明示的に複数を表す冠詞が付いている場合も同様である。

(16) nā akua nāna i hana ke ao nei
 [複数]神 [完了]作る[冠詞]世界 この
 「この世を作った神々」- Beckwith 1932:17

例(16)では被修飾名詞 nā akua「神々」には明示的に複数を表す冠詞 nā が付加されているが、この場合にも、3 人称単数代名詞要素-na を含む形 nāna が用いられている。

2. 2 C1 タイプの関係節

C1 タイプの形式は以下のように図示される。<前置詞+代名詞>を述語とする関係節であり、被修飾名詞には述語部分<前置詞+代名詞>中の代名詞が対応する。

(17) _____ 関係節
 被修飾名詞- <前置詞-代名詞>-主語名詞
 _____ 述語

C1 タイプが最も多く見られる例は、A2 タイプと同じ形式 nāna {na (所属を表す前置詞) + -na (3 人称単数代名詞要素) の融合形} を用いるもの(例文は(18))と、nona {no (na とは違う所属を表す前置詞) + -na (3 人称単数代名詞要素) の融合形} を用いるもの(例文は(19))である。

(18) ka mea nāna ka moe
 [冠詞]者 [所属]-彼/彼女[冠詞]夢

このタイプでよく見られるのは、3人称単数代名詞所有形 *kona* 「彼の/彼女の/それの」又は *kāna* 「彼の/彼女の/それの」が用いられるものである。*kona* と *kāna* の違いは *nona* と *nāna* の違いと同様で、*kāna* は所有権をコントロールできるものの所有を表し、一方、*kona* は所有権をコントロールできないもの又は場所として使うものの所有を表す⁽¹⁾。*kona* と *kāna* という形式中の *-na* は *nāna* 等と同じく3人称単数代名詞要素である。

(25) 'O *ka i'a i kū kona waha*
 [NC][冠詞]魚 [完了]掛かる それの 口
i ka makau
 ~に[冠詞] 釣り針
 「(その) 口が釣り針に掛かった魚」
 -Pukui (1983:263)

例(25)で、被修飾名詞 *ka i'a* 「魚」に關係節内の3人称単数代名詞所有形 *kona* 「彼の/彼女の/それの」が対応している。

C2タイプの例はかなり少なかったが、被修飾名詞が明確に複数である例が少数であるが得られた。A2タイプやC1タイプの時とは違い、ここでは、3人称単数所有形が使われる場合(例文は(26))と3人称複数が使われる場合(例文は(27))の二つの例が得られた。

(26) 'O *nā li'i i hewa kona*
 [NC][複数]酋長 [完了]誤った 彼の/彼女の
noho ali'i 'ana
 統治する こと
 「その統治(のやり方)が誤っていた酋長たち」
 -Malo (1987: 133)

(27) *nā mea i 'oi aku kā lākou*
 [複数]もの [完了] 優る それら(3)の
'ike ma mua o ka lio
 知恵 ~に 前 ~の[冠詞]馬
 「馬よりもその知恵が優るもの」
 -Mookini (1985:37)

例(26)では被修飾名詞は複数の冠詞 *nā* が付いた *nā li'i* 「酋長たち」であるが、それに対応するのは關係節内の3人称単数代名詞所有形 *kona* であり、数において一致していない。一方、例(27)では被修飾名詞は複数の冠詞 *nā* が付いた *nā mea* 「もの達」で

あり、それに対応するのは關係節内の3人称複数代名詞所有形 *kā lākou* 「彼らの/彼女らの/それらの(3人以上)」が対応し、数において一致している。

2. 4 まとめ

ここまでの分析結果をまとめると以下のようになる。

- i) A1タイプとC1タイプにおいては被修飾名詞に対応する關係節内の3人称代名詞は数において一致しない。単数・複数の区別にかかわらず3人称単数代名詞要素 *-na* 又は3人称単数代名詞(独立形) *ia* が用いられる。
- ii) C2タイプにおいては、修飾名詞に対応する關係節内の3人称代名詞所有形は数において一致する場合としない場合がある。被修飾名詞が単数の時は3人称単数代名詞所有形 *kona* 又は *kāna* が用いられる。被修飾名詞が複数の時は3人称単数代名詞所有形が用いられることもあるが、3人称複数代名詞所有形 (*kā lākou* など) 用いられることもある。

3 結び

3. 1 關係節で用いられる3人称代名詞の位置づけ

C1タイプで斜格前置詞を用いる例(例文(22)と(23)、及びC2タイプの例(例文は(25)、(26)、(27))については使用される頻度が低く今回豊富なデータを得られたとは言いがたい。これらについては今後さらにデータを拡充し吟味する必要があるかもしれない。しかしながら、被修飾名詞が複数でもそれに対応する代名詞として単数形を用いるという数における不一致の例が、特にA2タイプ(例文は(14)から(16))及びC1タイプで所属の前置詞 *na* を用いる場合(例文は(20)と(21))のような例を中心として多数得られた。被修飾名詞に対応する關係節内の3人称代名詞は、被修飾名詞と数において一致しないことが全体的な傾向と言える。

数の一致をしない、或いはしないことがあるというのは關係節で用いられる場合の独特の特徴と考えられる。通常の人称代名詞として使われる場合には当然のことながら数に一致するのに対して、關係節で用いられる場合に文法的特性が異なるこ

とを考えると、3人称単数代名詞の用法として、通常の用法と関係節における用法と区別する必要がある。以下に、それをまとめる。

(28) 3人称単数代名詞の関係節中における用法: いくつかのタイプの関係節において、被修飾名詞と関係節の関係を表すのに3人称代名詞が用いられる。この場合、単数・複数の区別に関わりなく3人称代名詞単数形が広く用いられる。

3. 2 マオリ語とタヒチ語の事例

前の節で分析したハワイ語の状況とハワイ語の同系言語の事例を比較する。

マオリ語にも複数のタイプの関係節がある。その中にはハワイ語のA2タイプと類似した事例がある。以下の例はハワイ語の場合と同じく *nā-na* (<前置詞 *nā* + 3人称単数代名詞要素>の融合形) が使われる例である。

(29) *ngā tohunga nā-na te waka*
 [複数]熟練者 [冠詞] 舟
i tārai
 [完了] 造る
 「舟を造った熟練者たち」 - Harlow (1996)

例(29)では、被修飾名詞は複数の冠詞 *ngā* が付いた *ngā tohunga* 「熟練者たち」であり、形式的にも明確に複数である。それに対応するのは関係節内の形式 *nā-na* 中の3人称単数代名詞要素 *-na* であり、被修飾名詞と数において一致していないという点でハワイ語のA2タイプの場合と同様である。しかしながら、古典的なマオリ語では被修飾名詞が単数・複数の区別に関わらず *nā-na* が用いられるが、現代は被修飾名詞の数にあわせて、単数、双数、複数に一致すると指摘されている⁽⁴⁾。

タヒチ語でも、ハワイ語のA2タイプやC1タイプに相当する関係節があり、ハワイ語と同じ形 *nāna* 又は *nona* を用いるものがあるが、被修飾名詞が複数の場合に、*nāna* ではなく *nā rātou* (*rātou* は3人称複数代名詞) を使う事例も指摘されている⁽⁵⁾。

このように、ハワイ語のC2タイプで見られたような数の一致に関する揺れは同系言語にも見られる現象であることは興味深い事実である。

謝辞

貴重なご指摘とコメントを下された査読者の

方々にお礼の言葉を述べたい。尚、この研究は平成15年度～16年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)「ポリネシア諸語の関係節構造に関する対照研究」(課題番号15520239)による研究成果の一部を拡張したものである。

文献

- (1) Wilson, William H., *The O and A Possessive Markers in Hawaiian*, M.A. Thesis, Honolulu, University of Hawai'i at Manoa, (1976)
- (2) 塩谷亨, 関係節の定義と述語タイプ, 室蘭工業大学研究報告(文科編)46, (1996), 93-110
- (3) Hawkins, Emily A., *Pedagogical Grammar of Hawaiian*, Honolulu, University of Hawai'i, (1982)
- (4) Harlow, Ray, *Maori*, Munchen-Newcastle, Lincom Europa, (1996)
- (5) Lazard, Gilbert and Louse Peltzer, *Structure de la langue tahitienne*, Paris, Peeters, (2000)

分析資料一覧

- Beckwith, Martha W., *The Hawaiian romance of Laieikawai*, U.S. Bureau of American Ethnology, Thirty-third annual report, 2850677, Washington D.C., (1911-1912)
- Beckwith, Martha W. *Kepelino's tradition of Hawaii*, Bernice P. Bishop Museum Bulletin 95, New York, Kraus Reprint, (1932)
- Hawaiian laws 1841-1842*, reprinted by Ted Adameck, (1994)
- Ka hoku o Hawaii*, Hawaiian language newspaper.
- Malo, Davida, *Ka moolelo Hawaii*, Honolulu: The folk Press, (1987)
- Mookini, Esther T., *O na holoholona wawae eha o ka Lama Hawaii*, Honolulu,: Bamboo Ridge Press, (1985)
- Nakuina, Moses K., *Moolelo Hawaii o Kalapana*, privately published.
- Pukui, Mary K., *'Ōlelo no'eau*, Honolulu, Bishop Museum Press, (1983)